MAGIC　OF　THE　WORLD

紅　劉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＡＧＩＣ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ

【Ｎコード】
Ｎ３８１４Ｘ

【作者名】
紅　劉

【あらすじ】
セカイの終わりを見た少年。
セカイの終わりを原因たる少女。
二人の出会い。それは新たな終わりの始まりであった。

＊まだ本編ではありません

プロローグ

空が紅く燃えている。

大地が朱く燃えている。

ここは青空と緑の草原が何処までも続く小高い丘だった。

父さんと母さんが出会った思い出の丘。僕が初めて彼女と出会った大切な場所。

その全てが紅く朱く赤く燃えている。

思い出も記憶も大切な思いも・・・・全てを消し去るように燃え続けている。

幼い僕には何もできない。ただただ燃え続ける丘を見続けるだけ。顔を伝う冷たい何かを拭うこともなく、ただただ見続けるだけ・・・・。

「ーーーーー」

何かを叫ぶけれど聞こえない。全ては燃え盛る炎に遮られる。

「ーーーー！？ーーーーー！？」

それでも叫ぶ。

ーー届け、届け、届けーー

喉から絞り出すように、肺の中の空気を全て出し切るように・・・・・呼吸も忘れて叫び続ける。

「・・・・・・！？」

不意に目の前の景色が霞み出す。それに気付いた時、息苦しさと激しい頭痛が同時に襲いかかってくる。

「ーーーーー！？」

それでも僕は叫び続ける。・・・・・その声がもう誰にも届かないとは知らずに。

第零章第一話　ー狩る者ー（前書き）

予告通り今週中の投稿ができまさた。

至らない点が多々あると思うので感想、質問があらましたらお願いします

第零章第一話　ー狩る者ー

―ＳＩＤＥ??―

星が走る。

空を、ではない。立ち並ぶ高層ビルの間を幾つもの光の球体が何かを追いかけるように複雑な軌道を描きながら宙を走っているのだ。

いや、追いかけるようにではない。あの球体は実際にある標的を追い掛けているのだ。

警備用魔力弾（セキュリティシェル）

攻撃性は無くただ標的を追い掛け、地上の警備会社に標的の位置情報を知らせるだけの簡易的な警備装置の一種。魔術と科学が混同したこの世界では別に珍しくもない装置だ。

『大宮（おおみや）君、警備用魔力弾からの情報はしっかり届いてる?』

不意に耳に嵌めたイヤホンから少女の声が響く。俺、大宮　凜（りん）は左腕の腕時計型端末を一瞥してから答える。

「問題ないよ綾河（あやかわ）さん。相変わらず凄いハッキング技術だね」

俺の返答に「当然よ」と答えながらイヤホン越しの綾河さんは自信に満ち溢れたような声色で続ける。

『魔工学で制御しているシステムなら私の能力から逃れる事はできないもの』

その返答に苦笑しながら、俺は眼下に広がる高層ビル群を眺める。と同時に、この何の変哲もない鉄筋コンクリートで作られたビル群にもあの技術が使われているのだと思い至る。

―魔工学―。数十年前から開発が勧められた魔術と科学が融合した新技術。「この技術が発達したからこそ魔術師と一般人の間にあった壁は無くなり、事故や災害時の被害が減った」とは賢者兼科学者だった俺の爺さんの言葉だ。

魔工学の発達は確かに、今の世界をより良い方向へと進めている。実際にこの技術が発達したために解決した問題も数え切れない程あるし、現在進行形で俺達も御世話になっている。しかし、だ。魔工学の発達は決して良い方にばかり傾いた訳ではない。

魔術犯罪の増加。魔術が一般的に公開され、ある程度の魔術なら誰にでも使えるようになってしまった。その結果、あらゆる分野に魔術を取り入れてしまった事からハッキングや妨害行為、果ては私怨による傷害事件が増加した。

今現在、仲間に市の警備システムをハッキングさせている俺が言えることでもないけど、このままでは犯罪が増加する一方だと思う。まぁ、だからこそ俺達のようなギルドが存在するのだろうけど……。

『―――さて、後ちょっとで標的（ターゲット）を天松（あままつ）さん達が追い込むから準備の方よろしくね』

俺が少し物思いに耽っている間に作戦は最終段階に移行したようだ。俺は「了解」と短く答え、ビル屋上の縁に足を掛ける。遥か下には外灯の光源が見て取れるが、それ以外には無機質な闇が広がる夜の街だ。

左腕の端末にはこの街の平面地図が詳細に表示されている。俺はその中の幾つかの光点と実際に街中を飛び交う外灯とは違う光源に注意を払いながら待ち構える。

地図上の光点は徐々に一箇所に集まり出し、実際の光源は複雑な立体軌道で俺の立つビルから凡そ１００ｍほど先の路地裏に集まり始める。

そのタイミングで俺はビルの縁から飛び降りた。

―ＳＩＤＥ綾河―

私、綾河　翠香（すいか）の周囲には大小２種類のホロウィンドが計１５枚展開されている。内、小型のモノ１２枚にはハッキングした市の警備会社が所持する警備用魔力弾の映像が、残りの大型３枚にはそれぞれに一人ずつ人が映っている。

私から見て右手側にあるウィンドには大柄で筋肉質な男、蓬狼（ほうろう）龍聖（りゅうせい）が映っている。陸戦特化で飛行系の魔術を一切使えない彼はビルの壁を蹴って対面のビルへと跳びながら移動している。一体どんな身体強化を施せばあんな大道芸ができるのか私には理解できない。

対照的に左手側のウィンドには小柄な少女、天松　美雨（みう）が長髪をなびかせながら空中を滑るように移動している。蓬狼君とは違い理解できる範囲の移動方法だ。……しかし毎度思うのだが、あの身長（目測１５５ｃｍ）であの胸囲はないと思う。軽くＤはいっている。それでいて顔も可愛い系の美少女なのだからつくづく神様というモノは不公平だ。

そして最後、正面にあるウィンドには女性よりの中性的な顔立ちの少年が映っている。大宮　凜。身長１６０ｃｍちょっとと男子に

しては小柄で線の細い体躯とその顔立ちから少女に間違われる事もしばしばある私達ギルドのリーダーだ。

彼は今、とあるビルの屋上からこの捕縛作戦の様子を窺っている。他の２人に対象を追わせ、確実に捕まえるために待機してもらっている訳だが、正直待機場所を間違えたとしか言い用がない。対象の不意を付く為に頭上からの奇襲を提案したのが彼とはいえ、流石に高さ７０ｍはやり過ぎた。大宮君自身は「大丈夫」と言っていたけど、少し間違えれば路上に叩き付けられたトマトのように……。やっぱり止めるべきだ。反対側には高さが半分程のビルがある。奇襲だったらそのぐらいの高さだって十分に成功する。

「そうと決まれば……」

私は正面のウィンドに触れて通話（コール）しようとして……

大宮君が飛び降りた。

「ちょぉぉぉぉぉぉ――――――――っ！？」

私は慌てて通話を繋ぐ。

「ちょっと大宮君、何はやまってるのよ！？」

『ん？何って計画通りに飛び降りただけだけど？』

どこか飄々とした態度で落ち続ける大宮君の返答を聞きながら、私は残りの１４枚のウィンドを一瞥する。確かに蓬狼君と天松さんが標的を誘導し、警備用魔力弾が他の路地に入ろうとする標的を牽制している。この分なら後一分もしない内に目標地点に追い込むだろう。

「だからって行き成り飛び降りるのはどうなのよ！」

やや語気を荒げながら抗議する私とは対照的に不思議そうに小首を傾げながら、

『いや、あのタイミングで飛ばなければ奇襲に成功しないと思うよ？俺としてはベストなタイミングだったと思う』

などとのたまう。こ、こいつは……。

「それでも行き成り飛び降りる事はないでしょう！？観測側からしたらリアルタイムで飛び降り自殺を見せられてるようなものなのよ！？」

『何を今更。俺がこの程度の高さじゃどうにもならないのは知ってるだろ？』

「確かにそうだけど、万が一ってことがあるでしょうが！？」

尚も抗議を続ける私に大宮君は面倒臭そうな表情を向けながら正面―私から見て画面左側―を指差した。私が小型ウィンドで確認すると、標的が予想よりも早く目標地点に到達しようとしていた。

『っー訳で俺は戦闘体勢に入る。じゃっ』

「あ！？ちょっ、待っ……」

私が言い切る前にプツンッ、と通話が切られた。

―ＳＩＤＥ凜―

俺は綾河さんとの通話を切るのと同時に体内の魔力回路を起動し、発動の呪文（キー）を唱える。

「刀剣錬成（ソードアート）」

直後、俺の右手に抜身の刀が現れる。次いで、俺は落下中の足元に風を集束、若干の前傾姿勢を取り刀を片手で構える。そして、

「フッ！！」

数秒の降下後、短い呼気とともに前方――ビルとビルの間にある路地へと向かい突進する。

「っ！！」

直後、その路地から現れた男が驚愕の表情とともに身を強張らせた。

男の名前は伊達（だて）　広瀬（ひろせ）。違法薬物所持及び傷害により国際組織Ｉ．

M・Mから指名手配されている犯罪者、そして俺達が今回捕まえようとしている標的だ。

「取り敢えず吹っ飛べ！！」

言うと同時に俺は右半身を少し引くようにしながら刀を背中に回し、十分な勢いを付けながら振り抜く。

八之太刀＜空割（からわれ）＞。俺が収得する古流刀術、神羅皇冥流（しんらこうめいりゅう）の技の一つで、本来なら接近の上で近距離から全体重を掛け叩きつけるように切る技だ。全体重を掛ける過程で一度止まる必要がある技だが、俺はちょっとしたアレンジを加えて移動――というよりも突進しながら放てるようにした。只でさえ重い一撃に突進の勢いを加えれば、威力は大幅に増加する。結果として相手を弾き飛ばす事も可能なほどに。

「ぐぅっ！？」

当然、伊達も例外では無く、何とか持ち上げクロスした腕でガードしたものの暗がりの広がる路地へと吹っ飛んでしまう。

俺は振り抜いた姿勢のまま着地し、体勢を低くすると地面を力の限り蹴り出す。一瞬だけ視界がブレ、次の瞬間には未だに飛び続ける男の眼前へ移動する。縮地や瞬動―神羅皇冥流では＜天歩＞という―などの移動術による高速移動。魔術師同士の戦いでは割と必須の技術なのだが、伊達はまるで初めて目の当たりにしたかのように目を見開いた。

（そーいや魔術師ではないんだっけ）

この男の資料は今日の作戦の前に目を通した。元々一般人の家庭

で生まれ育った伊達には魔術の才は無い。しかしこの男、魔術師に憧れている節があり、家宅捜索の際には幾つもの魔術用の触媒が発見されたとのこと。しかし、才無き者がそう簡単に魔術を使えるようになる訳が無く、伊達は禁呪まがいの違法魔術に手を染め五ヶ月前に一度逮捕されている。手を出した魔術自体は軽いものだったので三ヶ月の懲役で済んでいる。しかしその一ヵ月後には奇怪な行動が見え始め、つい二週間前には職務質問したＩ．Ｍ．Ｍの職員へ暴行、傷害事件へと発展した。暴行を受けた職員の話からある薬物の所持及び服用の可能性が浮上し、学園への依頼が回ってきた。簡単な経緯はそんな所だ。普通に考えれば一般人が戦い慣れた魔術師に敵う筈が無い。だからこそ――――

（気を付けなくちゃ、な！！）

下段の構えに近い状態で構えていた刀を振り上げ、伊達の腕を真上へと弾く。

伊達が何をしたのか、その点に付いては資料に「攻撃は何かに弾かれ、何かに撃たれた」としか書かれていなかった。最初の一撃だって魔術師でもない奴がまともに受ければ両手はそのまま切断されていた筈だ。以上の事から伊達は“硬質化”を伴う身体変化か“念動力”の能力を得ている。それが俺の考えだ。この手の能力は以外にも厄介なものだ。だったら――

（反撃、防御の隙を与えない！！！）

弾いた直後に左の拳で顎を突き上げる。刀は放棄し、右の拳で腹部へのストレート、またも天歩で眼前へと移動し両拳による乱打を叩き込む。乱打の最中も伊達の体は後方へと流れて行く。それに追い縋りながら乱打、強突き、余裕がある時には蹴りを加えながら連撃の手を休めない。そして、

「ラストォッ！？」

男の背後にビルの壁が見えた段階で俺は連撃の手を止め、男と密着するほど接近する。そして腹部に右の掌底をあて、左は肘を曲げピッタリと自分の身体に密着させる。そして右足の爪先でしっかりと地面を掴み身体を固定、左足が踏み出されるのと同時に右腕を勢いよく押し出す。

武器を扱う流派にとって武器を失った時の対処として体術を覚えるのは珍しい事ではない。勿論、神羅皇冥流にとっても例外ではない。神羅皇冥流体術＜華殴（かおう）＞。構えを極力小さくする事で一点への攻撃力を高める技だ。

伊達の体は華殴の威力そのままに壁へと激突し、そのままズルズルと壁に背中を付けたまま落下する。壁に多少の罅割れが走る程の一撃だったけど、十分に加減もしていたから内臓破裂、みたいな事はないだろう。———骨は何本か折れてるかも、だが。

「さて、さっさと逮捕しますか」

攻撃中は気付かなかったが、いつの間にか他の三人も集まって俺の後方で待機している。相手は完全に気絶しているし、これ以上時間を掛ける必要は無い。さっさと手錠を掛けてＩ．Ｍ．Ｍに突き出して家帰って寝よう。

そう考えながら俺は伊達の手に手錠を掛けた。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第零章第一話　ー狩る者ー（後書き）

如何だったでしょうか？今回は凜君チートのような強さでしたが、アレはこの世界でも平均より少し強いぐらいでただ単に伊達が弱いだけなんです。
主人公チートってのは私的あまり好きではないので（笑

これからは早くて2、3日に遅ければ2週間に一話単位で投稿していきます

次回はちょったした日常編を予定しています。登場キャラも累乗のごとく
増えますので書く量もヤバそうです。

あーーでもその前に裏企画ものを投稿するかもしれません

第零章第二話　日常の断片ー前編ー（前書き）

お、遅れてしまいました（汗

いやぁプロット書き直したり零式やったりしてたら、いろいろと不幸がありまして……結果、二週間も遅れてしまいました

本当にスイマセン

今回は前話の続き――というより翌日の話で、今後の話の展開に関係する内容と主要キャラの紹介が目的のような話ですね

本当は一話で一日を書ききりたかったんですけど、書いていたら予想以上に長くなって午前、午後に分けました。その内の午前です。

午後はなるべき早く――４日以内に投稿したいと思っています

P．S．

今話を書くに至り、＜マジワル＞の内容を一部変更しました。

第零章第二話　日常の断片ー前編ー

―ＳＩＤＥ凜―

「――この文は『災厄は目覚め翼は転生する』と訳す事ができ――」

寝起き一発目に聞こえたのは教師の解説だった。

机に突っ伏していた体勢を直し、周囲の様子を窺う。目の前には適当に広げられたノートと教科書、右手にはシャーペンが握られている。そして周りには一定の間隔で座っている学生達。

（……ああ）

そこまで観察し、今がどんな状況なのか俺はようやく理解する。

今日は４月１３日――平日だ。そしてここは俺が在籍する桜花蒼明学園（めいがくえん）高等部２年Ｆ組の教室で、一コマ目の授業中だ。因みに科目は神話学。世界各地の神話や伝承を学ぶ科目だ。

更に言うとここ最近の授業内容は“戦冥の刻（せんめいのこく）”という人類誕生後初の神々の戦争についてだ。

要約すると善神（スプタ・マンユ）と悪神（ヌンラ・マンユ）の戦いが神々の住まう世界――神界で起こる。戦局は善神に傾き、不利になった悪神は人間界に自身の力を分け与えた人間、反逆者（アヴェンジャー）を送り込んだ。善神はこれに対抗する為に同じく自身の力を分け与えた救世主（セイヴァー）とそれを補佐する１０人の使徒を送り込んだ。人間界での戦争は拮抗し、１００年にも渡り繰り広げられる。最終的には善神側が勝利を収め終戦する。だが封印される

間際、悪神はある言葉を残す。

【4と9が重なりし刻、冥府の門開きて戦の音が鳴く】

これは単純に悪神が復活しまた神々の戦争が起こる事を指している、世界的災害が起こるなど学者の間ではいろんな仮説が立てられている。ただどんな仮説にしろ“4と9が重なりし刻”が正確に何時を指しているのかわからない為、ただの神話と捉えている学者も少なくない。

魔術学校の高校生ともなると一度は耳にした事がある有名な神話だ。……まぁ、神話の和訳などは高校以上にならないと習わない内容のため殆どの生徒は真面目に授業を受けている訳だが……俺は初等部の頃からある人物に和訳や解釈を散々聞かされていた為、今更授業を真面目に受ける気などない。というより、高校教師よりもアイツの方が“戦冥の刻”については詳しく、より細かな解説をしていた。そんな訳で、一度聞いた解説を聞くよりも昨日の夜にあった仕事（バイト）の疲れを癒そうと授業開始早々、机に突っ伏したのだった。

「凜君、眠そうだね」

ボーッと中空を眺めていると隣の席の女子が小声で話しかけてきた。

「しょうがないだろ美雨。学園に提出する報告書書いてて殆ど寝てねーんだから」

俺も小声で返しながら隣の女子生徒――天松美雨を見遣る。

身嗜み、授業態度、成績、何を取っても優等生の上に学園屈指の

美少女。それでいて性格も良く、戦闘もそつ無くこなすため学園内でファンも多い。というよりファンクラブまで存在する。

そんな美雨だが異性の友人は極端に少ない。何でも「恐れ多くて話し掛けられない」らしい。チキン共めが。

「なに？私の顔に何か付いてる？」

「いや、何でもないよ」

苦笑しながらそう答える。

家が隣で所謂幼馴染みである俺や初等部の頃からの友人なんかは特に気にせず話せるが、その他男子からすれば羨ましい限りだろう。

「取り敢えず俺は眠い。授業終わるまでまだあるし、寝てるよ」

そう言い、俺は再度机に突っ伏す。隣からは呆れたような溜め息が聞こえてきたが、俺は気にすること無く眠りに付いた。

――――――――――――――――

一コマ目が終わる5分前に俺は眼を覚ました。

人間、割と如何でもいい時には都合よく寝起きできるものだ、とか本当に如何でもいい事を考えながら俺は小さく欠伸を漏らす。

正直に言うとまだ眠い。いや、ダルイと言った方が正確か？まぁどっちでもいい。兎に角、俺が言いたいのは「家帰って寝たい」それだけだ。

「――今日の授業はここまで」

残った5分も只々ボーッと過ごしていると、神話学教師がそう言って教室を出て行き、クラスが喧騒に包まれ始めた。

俺はその輪に入ろうとせず、中空を見詰め続ける。ぶっちゃけ何もする気になれない。ダルイ眠い帰りたい。

「おーい、なに魂抜けたように放心してんだ。戻って来ーい」

そんな言葉とともに突如、俺の後頭部に何者かのチョップが叩き込まれる。――いや、声から誰なのかはわかるけどな。

「痛ーぞ龍聖。喧嘩売ってんのか？」

後ろを振り返り、そこに立っていた男を睨みつける。対して男、蓬狼龍聖はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ、

「売ってはいねーが戦ってもいいぜ？」

そう返してきた。

イラッときたので顔面に向って拳を放つ。龍聖は笑みを浮かべたままそれを受け止める。更にイラッときたので床を蹴って、掴まれた腕を軸に身体を回転、龍聖の右側頭部へと蹴りを叩き込む。しかしソレも反対の手で防がれる。

「……」

「……」

暫しの硬直。そして……

「りゅうううううせえええええええええい！！！！」

「アハハハハハ――――――ッ」

俺と龍聖の不毛な争いが始まった。

――――――――――――

―ＳＩＤＥ龍聖―

「薫（かおる）が出迎えを要求してるぅ？」

凛の訝しむ様な声に俺は「ああ」と答えながら目の前のうどんを啜る。あの凛との不毛な争いから３時間が経った１２時３０分。俺達は学食に足を運び、昼食を取っていた。所謂昼休みだ。

「今朝アイツからメールがあってな……正確は帰国日時とそれに合わせた出迎えの要請があった」

うどんを食いながら俺はタームのメール機能を起動、今朝届いたメールを探す。探すが……授業中にメールやってた所為かなかなか見つからない。

「ああ、それなら……」

俺がメールを探していると、俺の隣に座る眼鏡を掛けた茶髪の女子、綾河翠香がタームを起動し、数回指を動かして一枚のウィンド

を俺達全員に見えるように展開する。

因みに昼食を食べているメンバーは6人。俺と凛は向かい会う様に座り、俺達を挟むように2人ずつ女子が座っている。俺側には翠香と大和撫子を言葉にしたような女子、柳（やなぎ）　楓（かえで）が、凛側には美雨と茶色がかった黒い長髪をポニーテールにした女子、才野原（さいのはら）　舞（まい）が座っている。

「……こんなメール、俺には届いてないぞ……」

何処か呆れたように溜め息を吐いて凛は頭に手を当てる。他の3人の反応を見る限り、このメールは俺と綾河にしか届いてないようだ。

「来週に帰ってくるってのは、また突然だね……」

美雨は苦笑を浮かべながらウィンドの文面をなぞる様に指を動かす。

「薫さんは悪戯好きですしね……」

楓は頬に手を当てて困ったように言葉を漏らす。

「これは悪戯の範囲では無い気がするんだけど……」

舞は呆れ半分、困り半分といった感じで楓の言葉を訂正する。

俺達が問題にしているメールの内容は以下の通りだ。

『4月19日に帰国する事が決まった。出来ればギルドメンバー―

―特に凜と龍聖に出迎えを頼みたい』

ギルドメンバーというのは今、この場で昼食を取っている6人の事。

学生ギルド＜蒼天（そうてん）の翼＞。

俺達が通うような魔術学校には学生同士がチームを組んで様々な依頼を請け負う規則が設けられている。それが学生ギルド。依頼内容は本当に様々で行方不明のペットの捜索から昨夜のような犯罪者逮捕まで幅広く請け負っている。これは魔術師としての将来を考えての規則らしく、故に学生ギルドはかなりの数が存在する。俺達の通う桜花蒼明学園だって百近いギルドが存在するぐらいだ。　目の前のメールは、そんな規則の下に組まれた俺達のギルド＜蒼天の翼＞の参謀役杉元（すぎもと）薫から来たものだ。

薫は4ヶ月程前に短期留学としてイギリスに行っている。俺は詳しい理由を聞いていないが、今年の年明けとほぼ同時にイギリスに旅立った。そいつが今度は突然戻ってくる、というのだから皆が困惑するのは分かる。

「俺は取り敢えず行く予定だけど……凜、お前はどうする？」

皆の反応に俺は苦笑を漏らしながら、取り敢えず自分の意見を言っておく。他の5人は―特に凜が―嫌そうな顔をしている。友人の頼みにそこまで嫌な顔をするものかねぇ……。まぁ取り敢えず凜だけでも来るように仕向けるか。

「因みに１９日は普通に平日だから合法的に学校サボれるぜ？」

「よし行こ…「ダメに決まってるじゃないですか！？」……むぅ」

凜の声を遮るように楓の声が重なる。まぁこの方法じゃあ生真面目な楓は反対するだろう。

「まぁ保留って事で考えとけよ。アイツが俺達に何かを頼むこと自体、珍しいことなんだしよ」

俺のその言葉で全員が難しい顔になる。

普段の行動こそ悪ふざけが多いが、学園でも五指に入る程の学力と抜群の身体能力を持つ杉元薫が直接、俺達に何かを頼むことなんて滅多にない。あっても厄介事に巻き込まれた時なんかが殆どだ。

場を静寂が包む。それぞれが今回の薫の頼みに対して思う事があるんだろう。

「まぁ龍聖の言うとおりだな」

最初に静寂を破ったのは凜だった。

「アイツが素直に助け求めてんだから行ってやりたい気持ちはある。だけど学業を疎かにして言い訳じゃない。だから今回の件はギルドとしてじゃなく個人として動く事にする。それでいいな？」

ギルドリーダーを務める凜の言葉に残りの４人も頷いた。まぁ、あんな事を言ってるけど、最終的には全員行きそうだけどな……。

「さて……そろそろ教室に戻ろうぜ」

全員の意見がまとまった所で凜が腕時計を確認して言う。次の時間は体育――とは名ばかりの模擬戦だ。そうなると少し早く戻っていた方が良いだろう。

そう結論付けた俺達は頷き、それぞれの食器を片付け始めた。

To Be Continued

第零章第二話　日常の断片ー前編ー（後書き）

如何だったでしょうか？

次話は前書きの通り４日以内に投稿予定―――というより、第零章をなるべく今年中に終わらせ、１月１日には第一章の一話目を投稿する予定です

なるべく実現できるように頑張ります

疑問質問などのメッセージお待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3814x/

MAGIC　OF　THE　WORLD

2011年12月5日00時47分発行